

発達障害児の行動調節における言語化の 確立操作機能に関する研究

(中間報告)

立教大学現代心理学部

中内麻美

【キー・ワード】発達障害児, 行動調節, 言語化, 確立操作

問題と目的

発達障害児の心理・教育的支援では、弁別刺激や強化刺激を系統的に操作することにより、目標となる行動を形成する手続きが主流となっている。支援の最終的な目標は、発達障害児者の自立であるとして、自己管理や行動調節の問題は重要な課題とされている。しかしながら、発達障害児の支援については、獲得した行動を応用したり、維持することが難しく、他者による環境調整や指示に依存することが殆どであり、発達障害児の自律的な行動を促進する手続きについては課題が残されている。

なかでも、言語化による行動調節は、対人関係や自己管理などの日常生活を送るための基本的なスキルの一つであるといえる。たとえば、私たちは他者からの言語すなわち指示、教示、命令、助言などに従って行動している。また、自律的な行動は自分自身に向けられた自己の言語化により促されていると考えられている。これらの言語化による行動調節は、他者あるいは自己の言語化に一致した行動の生起に対して社会的な承認や賞賛などの強化が随伴することにより、形成されると考えられている (Risley & Hart, 1968)。しかし、発達障害児においては、特別な訓練なしでは言語化による行動調節が成立しにくい側面がある。言語化による行動調節の支援メカニズムの研究として言行一致訓練が挙げられる。言行一致訓練は、言語行動と標的行動の一致を分化強化することを通して、標的行動に対応した言語行動を強化することにより標的行動を訓練場面以外で生起させることを目的としている (Risley et al, 1968)。つまり、言行一致訓練により、言語行動が弁別刺激として役立つことを学習し、言語行動が標的行動の媒介子となるとされる (Paniagua & Black, 1990)。しかしながら、言語化と標的行動の間には時間差が生じるため (小野, 2005)、複数の要因が関連しているといった指摘がなされており (Baer, 1990; 平山・武藤・小林, 1996)、それらの要因が言語化による行動調節を困難にしていると考えられる。従来の研究では、事前の言語化は標的行動の弁別刺激として機能することが前提とされてきた。しかし、標的行動の直前の刺激すなわち先行子は、弁別刺激と確立操作の2つの機能に分類することができる (Miltenberger, 2001)。弁別刺激は、行動の生起に強化的な結果が後続する際に存在している先行子である。その結果、弁別刺激があるときに、一定の行動は起きやすくなり、弁別刺激はその行動に対して刺激性制御を及ぼす。確立操作は、一時的に強化子の効力を増大させ、その強化子をもたらす行動の生起確率を高める先行子とされる (Michael, 1993)。確立操作の要因としては、主として生理的事象、物理的事象、人的事象が挙げられる (Luiselli, 1999)。生理的

事象には、急性や慢性の病気、空腹、眠気、薬の効果などが含まれる。物理的事象には、グループ構成、活動スケジュール、周囲の諸条件、配置されている物などが含まれる。人的事象には、他者との関わりの回数や質、指示の仕方、人物の特性などが含まれる。

確立操作を用いた支援方法では、他者による環境調整の手法として取り組まれてきた。しかし、他者が直接的に環境を調整することが困難な場面では、発達障害児は問題行動を再び示す可能性がある。長期に渡って適切な行動を維持させるためには、他者による環境調整は支援方法として不十分であると考えられる (Dunlap & Plienis, 1988; 武藤・多田, 2001)。

したがって、発達障害児自身が操作可能な要因に確立操作の機能を持たせることより、自律的な行動調節を促す支援方法を検討することができると考えられる。また、行動調節を促す言語化において確立操作機能を検証することにより、新たな示唆が得られるであろう。本研究は、自己による言語化を用いることにより、発達障害児が自らの環境を調整することができ、自律性を促進する支援方法となり得ると仮説を立てた。ゆえに、標的行動の生起を変動させる確立操作機能を持つ自己の言語化の成立条件を検証することを目的とする。

方法

参加者：行動調節の困難さを示す発達障害児1～2名を参加者とする。

場面：1回50分間の個別指導を原則として週1回、A大学内のプレイルームにて研究実施者および研究協力者数名が実施する。

標的行動：活動開始の合図から活動に取り掛かるまでの時間（反応潜時）、活動従事時間（反応持続時間）、活動回数（反応頻度）を分析の対象とする。

課題設定：課題設定は、事前の行動観察および知能検査によるアセスメントに基づき、参加者のニーズに応じて学習および運動作業活動を2～3種類設定する。

手続き：(1) ベースライン期：研究実施者は、活動前の手がかりや言語化へのフィードバックは行わず、参加者と活動を行う。(2) トリートメント期Ⅰ：活動前に研究実施者は活動を取り組む結果や肯定的な情報を提示する。(3) トリートメント期Ⅱ：活動前の情報提示に対して参加者の肯定的な言語化を引き出し、それに対して研究実施者は言語賞賛を与える。

分析方法：ハンディカメラにより個別指導場面を記録し、指導後にVTRによる行動観察を行う。

信頼性：第1観察者（研究実施者）と第2観察者（行動観察法を学んでいる大学院生等）が独立して観察を行い、観察者間の一致率を検討する。

考察の視座

言語化による行動調節の指導手続きは、自律的な行動を促進する方略として有用性が高いとされている (Paniagua, 2004)。しかしながら、言語化による行動調節のメカニズムについては、環境要因において説明されたものは見当たらず、一致した見解は得られていない (Baer, 1990; 平山ら, 1996)。本

研究では、言語化による行動調節において、個人を取り巻く生態学的要因に視点を向け、応用行動分析のアプローチにより検討する。このことにより、これまで内的事象として扱われていた言語化による行動調節について、より具体的な示唆が得られると考えられる。

これまでに予備研究において、自発的な言語化と行動調節の生起条件の分析を行い、場面設定と直前の刺激の両側面からアセスメントを実施することが必要であることが示唆されている。

引用文献

- Baer,R.A. (1990). Correspondence training: Review and current issues. *Research in Developmental Disabilities*,**11**,397 - 393.
- Dunlap,G. & Plienis,A.J.(1988). 直接訓練しない反応の般化と維持—時間差のある随伴手続きを用いて— Horner,R., Dunlap,G., & Koegel,R.L. Generalization and Maintenance : Life-style Changes in Applied Settings. Paul H. Brookes Publishing co. 小林重雄・加藤哲文 監訳 (1992) *自閉症, 発達障害者の社会参加をめざして—応用行動分析学からのアプローチ—*. 二瓶社
- 平山純子・武藤崇・小林重雄(1996). 言行一致訓練手続きの構成要素の分析—対象児の言語化の選択性に関する検討—. *心身障害学研究*,**20**,57-66.
- Luiselli,J.K.(1998). Intervention conceptualization and Formulation. Luiselli,J.K., & Cameron, M.J.Antecedent Control : Inovative Approaches to Behavioral Support. Paul H. Brookes Publishing Co., Inc. 園山繁樹・野口幸弘・山根正夫・平澤紀子・北原侑 訳. (2001). *挑戦的行動の先行子操作—問題行動への新しい援助アプローチ—*. 二瓶社. pp.27-42.
- Michael,J(1993). Establishing operations. *The Behavior Analyst*,**16**,191-206.
- Miltenberger,R.G.(2001). Behavior modification: Principles and procedures (2nd ed.). Belmont,CA: Wadsworth/Thomson Learning. 園山繁樹・野呂文行・渡部匡隆・大石幸二(訳). *行動変容法入門*. 二瓶社.
- 武藤崇・多田昌代(2001). 確立操作の概念とその有用性—より包括的な支援を可能にする分析枠の再検討—. *特殊教育学研究*,**39**,25-30.
- 小野浩一(2005). 言語刺激による行動の制御. *行動の基礎—豊かな人間理解のために—*. 培風館. Pp.267 - 279.
- Paniagua,F.A.(2004).Utility of verbal-nonverbal correspondence-training techniques in outpatient pediatric settings. *Psychological Reports*, **94**,317 - 326.
- Paniagua.F.A. and Black,S.A.(1990). Management and prevention of hyperactivity and conduct disorder in 8-10 year-old boys through correspondence training procedures. *Child and Family Behavior Therapy*,**12**,23-56.
- Risley,T.R. & Hart,B.(1968). Developing correspondence between the non-verbal and verbal behavior of preschool children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **1** ,267-281.

